

## 「武家政治の発展と世界の動き」の評価

長野県教諭

## 1 評価をめぐるあれこれ

## (1) 指導の改善につながる評価を

新しい学習指導要領が完全実施され、どの学校でも大いに悩みながら教育課程(社会科の指導・学習計画)の編成に努めてきた。今回の改訂にもなって、社会科の指導プランを作成し、教科会として一致点をみいだして指導を進めるだけでもたいへんなことだった。そうした検討作業の中で、評価するという点について改めて検討し直す必要が生まれている。評価のあり方は今後の教科指導研究上の大きな課題の一つとして改めて取り上げられることになるだろうと思われる。

本稿はそうした大上段のテーマに言及する性格のものではないが、確認しておかなければならないことがある。大前提は、「評価することは生徒の序列化をするためではない」ということである。

生徒の学習の状態をいかにとらえるかということが評価の中心課題であるが、私たち教師が生徒に対して行う評価は、逆にそのまま教師自身の指導のあり方の評価に結びつく。こうしたフィードバックによって学習指導の改善につながっていかない評価は不毛である。また、生徒の状態をとらえることは、その生徒に対する今後の指導の方向性をみいだすことでなければならないだろう。評価することは単に到達度として5、4、3といった数字の割り振りをするだけのことではないのである。無論こうしたことは「言うは易く行うは難し」の例に漏れないわけだが、私たち教師が常に意識していきたい戒めである。

## (2) これからの評価のポイントをどこにおくか

今回の改訂で大きく取り上げられているのが、「生きる力」である。これは「自ら学び自ら考える力」と言い換えてもよい。従来の知識・理解中心の評価からこうした点に評価の重点を移さなければならなくなっている。では、それをどのような観点から評価すればよいのか。

一つには、問題設定の力(四つの観点のうち主として社会的事象への関心・意欲・態度に当たる)をみることである。どのように問題を設定したかが、学習の方向性を定めてしまう。たとえば、江戸幕府の継続期間を信長や秀吉のそれと比較することで、なにが長期安定政権を可能にしたかという問題意識をもちながら学習することは、江戸幕府の諸政策の意味を鮮明なものにしてくれるであろう。

二つには関連的思考力(四つの観点のうち主として社会的な思考・判断に当たる)をみることである。関連的思考力とは、歴史的な比較や関連において、あるいは地理的な比較や関連においてものごとをとらえたり位置づけたりすることであり、社会科に欠かせない思考のあり方である。

たとえば、江戸幕府の身分制度や農民政策は秀吉の兵農分離とのつながりにおいてとらえられるべきだし、禁教政策を信長の一向一揆対策との比較や関連において理解することで、当時における宗教の重要性にまで理解が及ぶだろう。また、「四つの窓口」の理解には地理的な見方や位置づけが不可欠である。

三つには、表現の力(四つの観点のうち主として資料活用の技能・表現に当たる)をみることである。従来のような教師と生徒の一問一答の方式ばかりでなく、レポート作成や発表などの表現の場を適切に設けることが必要である。

こうした点について、教師が意識して教材を準備したり、学習場面を設定したりすることで、生徒のとらえは精度を増していくであろう。そしてそれが指導の改善に役立つであろう。

こうした点を踏まえつつ、本稿では「武家政治の発展と世界の動き」の単元での、一斉授業における評価のプランを例示してみたい。

## 2 「武家政治の発展と世界の動き」の評価計画

## (1) 大単元名「武家政治の発展と世界の動き」

小単元名「武家政治の完成」

## (2) 単元のねらい

①大単元のねらい (略)

②小単元のねらい

江戸幕府の成立の過程と大名統制、身分制度の確立などの支配のしくみや農村のようすの理解を通して、江戸幕府の政治の特色について考える。また、貿易統制にいたる幕府の対外関係の歩みや貿易統制下の対外関係の特色を、四つの窓口を視点にしてとらえる。

(3) 指導上の留意点 (小単位に関するもの) ↗

(4) 単元の展開と評価の計画 (大単元「武家政治の発展と世界の動き」のうちの小単元「武家政治の完成」)

| 時 | 学習事項           | 学習活動・内容   | 指導・評価の場面   | 評価の計画<br>A：できる、B：できない   |
|---|----------------|---|--|---|
| 1 | 江戸幕府の成立        | ・江戸幕府が長期政権を維持できた理由について信長や秀吉の政策を想起しつつ考え、大名の配置や幕府の経済力、軍事力などの面から資料を用いて追究する。                          | ・年表を用いて江戸幕府が260年に及ぶ長期安定政権を維持できたことに問題意識をもたせる。<br>・①「江戸時代の大名配置」から大名配置における幕府の意図を読み取らせる。                   | <u>関・態</u> ：問題意識をもてたか。また、問題に対するができたか。<br><u>思・判</u> ・ <u>資・表</u> ：大名配置の特色に気づいたか。また、そのことと幕府の意図を関連させて思考することができたか。   |
| 4 | 世界へひらいていた四つの窓口 | ・長崎の出島を描いた絵図を読み取り、幕府の貿易統制による影響を考えたり、朝鮮通信使のはたした役割について学ぶことなどを通して、江戸時代に四つの窓口を通じ、交易や交流が行われていたことを理解する。 | ・①図に注目させ、出島や貿易船のようすを読み取らせる。<br>・幕府による貿易統制が行われたことによる影響を考えさせる。<br>・四つの窓口を地図上で確認させ、環日本海地域における日本の位置を確認させる。 | <u>関・態</u> ・ <u>資・表</u> ：出島の形や大きさ、出入りする船の国籍などが読み取れたか。<br><u>関・態</u> ：貿易額の変化や、貿易品目の内容などについての疑問をもてたか。また、疑問に対する予想ができたか。<br><u>思・判</u> ・ <u>資・表</u> ：四つの窓口を大陸との関わりにおいて確認し、環日本海地域の中に日本を位置づけられたか。 |

※1 この単元の展開と評価の計画では「知識・理解」という観点の評価は省略し、「関心・意欲・態度」、「思考・判断」、「技能・表現」の観点の評価例をいくつか例示したが、このすべてを評価する必要はない。

※2 ここでの評価はA、Bの二段階で行うように計画している。もちろん、評価の段階をもっと増やすことは可能である (一般的には三段階評価をするケースが多い)。しかし、一斉授業という、多人数が動いている中で行う評価は、単純な方がやりやすい。二段階の単純な評価であっても、多くの学習場面で行うことにより、生徒のとらえは正確になっていく。当然、生徒一人ひとりをしていねいに評価する学習場面も必要になる (たとえば、テストの評価も重要である) が、評価の手段・段階等は、評価のねらいや場面に応じて、適宜判断していくべきであろう。

## 3 『中学生の歴史ワーク』の活用

帝国書院では教科書に準拠した『中学生の歴史ワーク』をつくっている。

この副教材は「資料で学ぶ」という副題の通り、資料を読みとり、自分の考えを書くという課題が中心のワークである。資料の多くは教科書に掲載されているものである。「歴史探偵になってみよ

①260年という長期安定政権を支えた江戸幕府の政治の特色を、信長・秀吉の政策との比較や関連の中で多面的・多角的に考察して理解できるよう、教材選定や指導過程に留意する。

②従来、鎖国という言葉でとらえられることが一般的だった江戸幕府の対外関係について、鎖国史観をつきくずし、貿易統制というとらえ方で理解できるよう、四つの窓口に注目しつつ、貿易品目や地理的な位置などにも目を向けながら考察するように指導する。

う」のコーナーもていねいに段階を踏んで考えていけるように準備されている。つまり、生徒にとっては資料を読み、思考を練るという学習を継続的に深めるために活用できるものとなっている。

それは逆に、教師にとって、一斉授業ではとらえることがむずかしい資料活用や思考・判断などの評価に利用できるということである。こうした副教材の利用も、検討してみる価値がある。